

「救い主が来られる」(マタイ二一章一〜一一節)

1 アドベント

クリスマス(降誕節)が近づいています。クリスマスへ向けて思いを整えていく、今日の日曜日からその季節に入ります。この時期、クリスマスまでの四週間を、待降節またはアドベントと言います。

アドベントという言葉は、もともと、到来あるいは到着、こちらにやって来るという意味です。救い主が来られる、それを待つ、お迎えする、それが待降節、アドベントです。

到来する、ということ、当然のことながら私どもは二つの到来のことを考えなければなりません。一つは、もちろん救い主イエス・キリストの到来ということ、文字通りクリスマスのことです。しかしこれは教会の暦の上でのことで、じっさいはイエス・キリストは二千年前すでに世に来られた、人として生きられたわけです。これが一つです。それは待つというより思い起こすことです。

もう一つは、これこそ現実のことで、イエス・キリストがこの地に再びおいでになる、再臨です。かつて一度こられたキリストは死んで甦り、天に昇り、いま父なる神の右に座してすべて支配し、私どもを執り成していただく。このイエス・キリストが天からもう一度来られる。この到来、これは私どもの基本の信仰ですが、この再びこられるイエス・キリストを待つということ、これがアドベントの、到来を待つこととの二つ目の意味です。

この二つの区切りに注意すれば、私どもの人生はこの最初の来臨としてのクリスマスと、もう一度来られて神の国を完成なさる第二の来臨のあいだにある、この二つの時のあいだで人間の生は営まれているのです。

それゆえ私どもはその信仰の歩みにおいて、一度来られたイエスを思い起こすだけでなく、もう一度来られるイエス・キリストのことを、この方を待つことを、忘れてはならないのです。信仰にはこうした希望の次元、待つということがあるのです。聖書の最後の言葉は「然り、わたしはすぐに来る。アーメン、主イエスよ、来てください」(黙示録二二・二〇)です。二度目の来臨のことを考えれば、待つこと、お迎えすることは、喜びとともに、悔改めをもって備えるということも意味します。アドベントはある場合には断食して祈る時として守られた。この四週間を私どもの教会もまたそうしたことをおぼえながら意味深く過ごしていけたら幸いと思います。

クリスマスを待つ楽しさを、欧米のキリスト教国の習慣では、子供たちはたとえばアドベント・カレンダーなどで体験しますし、大人も、たとえば私も何回か行ったことのあるクリスマス・マーケットなどで味わいます。クリスマス・マーケットで私よりもっとも印象深かったのは、じつはそれが終わった二四日の朝です。町の中心部の広場に一ヶ月も店が並び、まさにお祭りです。それが二四日の朝にはすっかり片付けられてしまいます。昨日までの喧噪はうそのように、何事もなかったかのよう、日常

が戻っていて、いやそれまで以上に静寂につつまれています。そしてその日、夕方からイブの礼拝がはじまり、夜中にそのクライマックスを迎えることとなります。

一三日に予定している私どもの「待降節の集い」もそうした喜びの集いであることを願っています。

2 ろばに乗って

待降節に入って今日の聖書箇所には伝えられているのは、主イエス・キリストのエルサレム入城です。

イエスをご承知のようにダビデの町ベツレヘムで生まれ、ガリラヤのナザレに育ち、そこで三十歳までを過ごし、自らをメシアとして自覚し、その使命を果たす生活に入っていきます。辺境の地ガリラヤがイエスの宣教のおもな舞台でした。王宮も神殿もあるエルサレムに、行ったことがなかったわけではありません。ユダヤ教の成人男子は年に一回の神殿詣を義務づけられていましたし、子供の頃は両親に連れられ巡礼の旅に加わっています。今度で七回目のエルサレム行きだと四つの福音書をつき合わせ計算している学者もいます。

しかしこの度のエルサレム行きはそれまでとはまったく違っていました。それはむしろ彼の生涯の終わりの出来事に関係していました。イエスは十字架につけられるためにその町に「近づき」（一節）「入られた」（一〇節）のです。そのため自らそこへ赴いたのです。

民衆が自分の服や、木の枝を切って、いわば絨毯のように敷いてお迎えする中をイエスはろばに乗って入って行かれる。まさに王として都エルサレムに入城されたということなのです。それをマタイは、預言者によって言われていたことの成就だと言っています。

それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「シオンの娘に告げよ。見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗って」。弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった（五〜七節）。

王としてイエスは入場された。しかし彼のその姿は、その光景は、この世の王たちの入場と何と違っていたことでしょうか。

もつとも目立ったことは、馬ではなく、ろばに乗って入ってこられたことです。それはある意味で滑稽なことでもありました。

馬は古代オリエントで昔から戦車を引く動物として用いられ、イスラエルでもそのようなものとして使われていました。馬は軍馬として戦争の象徴です。ろばは反対に人を乗せ、ものを運ぶ、平和と柔和の象徴です。それゆえ預言者たちは、たとえばイザヤは、神ではなく、馬を支えとしようとする者を痛烈に批判し（三一・一）、エゼ

キエルも神に忠誠をつくさず、かえってエジプトに使者をおくり馬と軍勢をえて生き延びようとしているイスラエルの王の子らの一人に向かつて深い疑問の念を表明しています（一七・一三以下）。白い馬に乗って正義と真理のために戦う黙示録の主の姿は例外です（一九・一一、一九）。

ろばに乗って入場されるイエスは「柔和な方」と言われます。柔和というのは聖書ではたんに温和さや素直さをいうものではありません。むしろ困窮の中にあつて、低くされ、ただ神のみに信頼して従いゆくことを意味します。山上の説教に出る「このころの貧しい人」というのも同じです。自分の力に依り頼み、上から力で人を支配する王ではなく、人とともにあり、人に仕え、最後には人のために命を与えるまでに愛する方です。そのような王としてイエスは入場なさいます。

イエスがいま入ってこられたエルサレム、預言者が「シオンの娘よ」と呼びかけた町エルサレムとは、いかなるところだったのでしょうか。今日の聖書箇所はイエスの入場のところですから、この箇所が続きでイエスが縄でつくった鞭をもって（ヨハネ二・一五）神殿の商人を追い出したことなど、いまはもちろん取り上げることもしません。けれども、この都で、一週間後、イエスが十字架につけられることを思えば、その聖なる都が神を失い、都は人の力と虚偽によつて支配されていたといつてよいだろうと思います。

そこに「お前の王がお前のところにおいてになる」と預言者は告げます。「おいでになる」とは、ですからエルサレムにとつて、何よりも裁きを意味せざるをえないのです。

しかし見方を変えれば、そのようなところにもイエスはおいでになるのです。エルサレムもそれによつてもはや神なしではないということ。神の都でありながら神からもつとも遠いところへとイエスはおいでになるのです。神からもつとも遠いところにも、むしろ私どものところにも、私どものこの世界に、過去も未来もふくめて私どもの歴史の中に、私どもの生活の中においてになる。もはやそこが神なしではないため、そこで神を信じて生きるためです。

3 十字架への道行きのはじまり

アドベントとは、申し上げたように、到来、こちらに来ることを意味します。イエスとは私どもに向かつての神の運動です。神は動いて来られる。神と人との限りない隔たりをこえて。これが聖書の神です。私どもはどのようにお迎えすればよいのでしょうか。

弟子たちは行つて、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷いた。そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によつて来られる方に、祝福があるように。いと高き

ところにホサナ」(六〇九節)。

今日の聖書箇所には、エルサレムに入ったイエスを関わりをもった人々が出てきます。まず気になるのは、ろばの所有者です。持ち主のいたことにはつきり言及しているのはルカによる福音書だけです。しかしこの持ち主は「主がお入り用なのです」という言葉に何も言わずにろばをイエスに差し出したのです。考えてみれば大変なことだと思います。あまり大事なものでないから差し出したのではない。ご用のために差し出したのです。どのようなものでも、ご用のために差し出す。かくてろばは豊かに用いられたのです。

弟子たちは、どうしたのでしょうか。イエスの命じられたように二人の弟子がろばを引いてきただけではない。上着をろばにかけてせめてもの鞍の代わりをして、イエスの入場の道ぞなえをしました。

群衆がここに出てきます。この言葉も存在もこれからイエスの十字架への道行きにおいてきわめて重要なものになります。彼らは自分の上着をしいて絨毯としただけではない。さらには木の枝を切つて道をつくつた。かつてイスラエルの王が即位したときの故事になつたことでした。ホサナ、ダビデの子にホサナと言つて、救い主の到来を賛美したのです。さらにもう一つの反応が、今日の箇所に出ています。

イエスがエルサレムに入られると、都中の者が「いったい、これはどういう人だ」と言つて騒いだ。そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言つた(一〇〇―一〇一節)。

これも群衆です。民衆の口から、イエスを正しく言い表すいわば告白の言葉が語られていたことが伝えられています。

しかし私どもは、イエスの受難の記事を読み進めていけば、イエスを王として、救い主としてこれら歓迎して迎えた人々が、神殿の祭司たち、ファリサイ人や律法学者らに先導され、あおられてイエスを十字架につけていったことを知ることになります。弟子たちもイエスを捨てて逃げ去つたこと、ペトロさえ最後の最後にイエスを否んでしまったことも知ることになります。イエスは十字架にかけられます。けれどもこの彼らがつけたイエスの十字架とその死が、イエスを十字架につけたその罪、裏切つたその罪をも赦すものであることは、あとから知ることになります。それを知つたときペトロも、他の弟子たちもイエスのために自らの命を捧げて惜しくないと思つたのです。救い主が世に來られたのです。この方によつて私どもが、私ども皆がその救いに与つたのです。このことを思いながらアドベントの日々を過ごして参りましょう。

(二〇一八年二月二日)